

私にとっての「方正」

渡辺 一枝

「方正」という地名を初めて聞いたのは、いつどこでだったろう。哈尔滨の外僑養老院を訪ねた時だったろうか、あるいは哈尔滨から佳木斯に足を延ばした時か、それとも訪日中の“中国残留孤児”の面会に代々木のオリンピックセンターに行った時だったろうか。1945年1月に哈尔滨で生れ、翌年9月に母に背負われて引き揚げてきた私だが、母の語った“満州”の思い出話に、方正の名は出なかった。幼い頃の私は母の思い出話の“ハルピン”に異国情緒溢れる情景を想い浮かべ、スングアリーが流れ、キタイスカヤ、モデルンなどと片仮名で表示される地名のある地で生まれたことを、誇らしく感じていた。けれども小学校に入り、そして中学生になる頃には、そんな出自を疎ましく思うようになった。そんな私が「ハルピンに行こう」と思っていたのは、母の死後のことだ。初めてのハルピン行で中国の人たちの話す言葉を耳にしてからは、私はもうそこを「ハルピン」とは言えず、中国の人たちに倣って「哈尔滨」と呼ぶ。それから後、幾度も哈尔滨に通い、また、哈尔滨を基点にして、中国の東北地方各地を訪ねた。残留邦人を尋ねての旅だった。方正という地名を聞いたのは、そんな旅を重ねるようになった日々でのことだ。そして、方正を訪ねたのだった。

春まだ浅く、道の端に並ぶドロノキはようやく芽吹いた頃だった。乾いた土の道には轍が、くっきりと刻まれていた。舞い上がる土埃で、後方の景色は見えなかった。前方に人だかりがして、私の乗った車もその手前で停車した。少し前に事故が起きたらしく、その処理に警察がやって来たところだった。パトカーが停まり、野次馬が集まっているのだった。乗用車と荷車が接触したらしく、荷車が路肩から下の畑地へ、転がり落ちていた。どうやら怪我人は出なかったらしい。

前に進めないまま、私は車から下りた。そして畑に傾いて倒れている荷車にカメラを向けた。すると途端に警察官が飛んできて、私からカメラを取り上げようとした。警察官の行為の意味が判らぬまま、私はその手をほどこうと必死だった。通訳のTさんも驚いて、警官に懸命に抗議した。事故を見に来ていた野次馬たちも私たちに加勢して、その警官に抗議の声をあげてくれた。落ちた荷車の方に居て事後処理にあたっていた上司らしい警官が騒ぎに気づいて、やって来た。Tさんや人々の話を聞いていた彼は私に部下の非礼を詫言、通行止めされていた私たちの車を通してくれた。それが方正の人々と私の、初めての出会いだった。

方正の招待所で“残留婦人”のOさんとSさんから話しを聞いているときだった。突然ドアが開いて入ってきた人がいた。東北弁の訛りで「やあ、日本語が聞こえたもんで懐かしくなって」と、その人は言った。びっくりしている私に「藤原長作といます」と名乗られ、問わず語りに藤原さんは、私に御自身を語られた。

OさんとSさんの経てきたそれぞれの日々にも、また、藤原さんの歩いてこられた道に

も深く胸を抉られた私だったが、翌日、更にまた心揺さぶられる人に会った。松田ちゑさんだ。方正県の職員の方に案内されて訪ねた先が、松田さんの家だった。

その日私は、松田さんから話を聞かせて貰い、また通訳の T さんを介して県職員の方の話を聞き、そして日本人公墓に連れて行って頂いた。「方正地区日本人公墓」と刻まれた石碑が建ち、その後方には、自然に生えていたものだろうか、それとも公墓建立の折に植えたものだろうか、松の木が枝を伸ばしていた。松の枝に、風が渡っていた。

今の私はその時の自分の不明を恥じるが、その頃の私は、“残留邦人”の存在を知ってはいても、それぞれの人たちが歩まざるを得なかった苦難の道も、この方正に流れた日々の歴史も、何も知らなかった。ただ、ただ、“母の語らなかつた満州”を知りたくて旅を重ねていたのだった。

O さん、S さんの話は各地で聞かせて貰った他の残留邦人の方たちの話をも併せて、私の国「日本」を、あるいは「国家」を考える上で大きな意味を持つようになった。私にとって方正への訪問は、それとは別の意味で大きな意味を持つ。藤原長作さん、松田ちゑさんに出会えた地であるからということは、言うまでもない。お二人の生き方から私は、多くを学んだ。が、方正が私にとって大切な地であるのは、そうしたことからだけではない。

方正への入り口で、名を知らぬ人々が素性の知れぬ私のために官憲に対して声を上げてくれたことは、それまで中国の人たちに対して抱いていた私の考えを変えた。それまでの私は、権力者の前では人々は卑屈に黙りこむしかないのであると思こんでいた。だがそうではなく、道理のないことに対しては自分に関わりがない時であっても、はっきりと声をあげるのだと知った。

方正を二度目に訪ねたのは、天安門事件の直前のことだ。その時の O さんは、北京大学に在学中の息子さんの身を、とても案じていた。私は天安門広場で見えた光景を、O さんに伝えた。そこには幾つもの人の輪が出来ていて、それぞれの輪では学生や労働者だろうか、誰かが中心となって、荒ぶらないがしっかりと通る声で、周囲の人々に何か語りかけていた。そしてその人を囲む人垣の中からまた、何か言う人が居て、そんな討論の輪が幾つもあったことを伝えた。私はそうした光景から、中国の人々の持つ変革への熱望とエネルギーを感じていた。

方正から北京に戻り、二日後に北京を発って帰国した。天安門事件が起きたのは、その翌日のことだった。

方正は今も私に、「国家」というものを、またそこに生きる人たちの生き様を、そしてまた国を離れた友好はそれぞれの地に生きる人と人の結びつきによってこそ築かれるということ、考えさせてくれる。日本、そして中国を思う時、方正は私に大きな意味を持つ。

<わたなべいちえ、作家。著者『ハルビン回帰行』（朝日新聞社）には「残留婦人」との交流が詳しく描かれている。他に『チベット馬で行く』（文春文庫）『わたしのチベット紀行』（集英社文庫）など。長年チベットの自然や人々の暮らしを撮り続け、写真展も開く>